

「する・みる・支える・知る」など、スポーツとの多様な関わり方を学ぶことを通して、生涯にわたり運動に親しもうとする大内っ子の育成

学校名 山口市立大内小学校（山口県）3～6年

全校児童数 688名（男子355名 女子333名）

（本実践に係る問い合わせ先）

電話番号 083（927）0011

学校メールアドレス oouchi-e@yamaguchi-ygc.ed.jp

1 実践（研究）のねらい

- （1）著名なオリンピックやパラリンピアンによる指導を受けることによって、運動や体力向上についての意欲を高めたり、技能の向上を図ったりする。
- （2）パラリンピックの歴史や意義等を学んだり、障害を持った方の話を聞いたりすることを通して、オリンピック・パラリンピックに対する理解を深めるとともに、共生社会の参画者としての意識を高める。

○課題を解決するために実践した具体的な取組について

1 具体的な取組内容・方法、取組を進める上での工夫点等

- （1）成迫選手によるハードル教室を行った。事前に本人に関する情報を児童に紹介し、期待感と意欲を高めた。当日は本人がここに至るまでに大切にしてきたことや学んだことなどを中心に講演を頂き、その後はグラウンドにてハードル教室を行った。
- （2）オリンピック・パラリンピックに対する理解を深めるとともに、障害を持った方と共生する社会を構築する態度を養うため「I'm possible」を用いて授業を展開した。
- （3）パラリンピアン藤田さんによる車椅子ボッチャ体験教室を行った。事前に視覚障害者の方のお話を聞いたり、車椅子体験をしたり、高齢者疑似体験をしたり、点字の学習をしたりするなど、福祉に関する様々な実体験を通して、子どもの興味や関心が高まった状態で臨んだ。
- （4）体育科を専門とする教員養成系の地元大学生を、体育科の授業、体育的な行事にボランティアとして招聘した。決め細やかな対応を取ることとともに、ボランティアとして体育的行事に参加することへの理解を深め、憧れなどの感情を育むことを目的とした。

○成果の意義

- 1 著名なスポーツ選手から一連の指導を受けることによって、多くの子ども達がリズムカルにハードルを走りこえることや得点を競い合うという、その運動ならではの楽しさに触れることができていた。
- 2 本事業を通して共生社会をともに構築していく意識が芽生えていることが振り返り等から見て取れた。

○今後の課題

- 1 沢山の体験を通して子どもたちの理解を深めようとするほどに、外部団体との連絡調整が煩雑になったこと。
- 2 短絡的に障害を持っているのにすごい、という意識の児童も存在するので、一歩踏み込んで自分たちも共生社会を創り上げる一員である「当事者意識」を育てていく必要性を感じた。

○研究内容

【オリンピックによるハードル教室】

オリンピックによる講話やハードル教室によってハードル走の技能の向上を目指した。



【I' m possible を用いた授業】

I' m possible を用いてパラリンピックの歴史や意義を学ぶことで、共生社会の一員としての態度を養うことを目指した。



【車椅子ポッチャ体験教室】

オリンピックによる講話やポッチャ体験によって、バラスポーツなどへの理解を深めることを目指した。



【地域大学生との連携】

大学生による体育ボランティアを通して、ボランティアとして体育的行事に参加することへの理解を深めることを目指した。



【各取組後の児童の振り返り】

オリンピック、パラリンピックへの興味関心が高まったことのみでなく、ともに共生社会を構築する一員であることの自覚や、自己の運動への関わりに対する意識の向上が見られた。

以下、各事業終了後の児童の振り返りを抜粋

「障害がある方も、スポーツを通して色々な楽しみ方をしていて、すごいなと思いました。」 4年女子

「体のどこかが不自由であっても、本人や周りの人の工夫によってできるようになり、楽しむことができるようになった。」 5年女子

「障害を持った方々に希望を与えるために、道具の工夫や、ガイドの方の工夫などがあることが分かりました」 5年男子

「ハードルを同じ足で同じリズムで走り越えることがとても楽しかった。」 6年男子

【今後の継続した取組に向けて】

児童が生涯にわたって運動に親しもうとする態度の育成のため、以下の点に留意して継続した取組を行う。

ハードルにおいては、県教委からお貸し頂いた開閉式のハードルを用いて、今後もハードルの楽しさを十分に味わわせる体育科の授業のあり方を追求していきたい。「I' m possible」を用いた授業は、内容として高学年のみだけでなく、中学年でも十分に理解し得る内容であったので、来年度以降、中学年での実施も視野に入れて行きたいと考える。福祉体験については来年度も4年生を対象に総合的な学習の時間で位置づけ、2020年へ向けてさらにオリンピックパラリンピックに対する興味関心を高めていきたい。学生との連携は、大学側とのニーズが合致すれば、是非来年度も継続して取り組んでいきたい事業であった。